



近世大坂の出版統制と書物・出版環境

石橋，知之

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8790号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490015>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論 文 題 目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

近世大坂の出版統制と書物・出版環境

氏 名 : 石橋 知之

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 奥村 弘 教授
 (副) 古市 晃 教授
 (副) 樋口 大祐 教授

(注) 4, 0 0 0字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

本稿は近世出版業の歴史的展開を解明するために、その支配権力との関わり及び本屋の出版活動を取りまく環境を論じることを目的とする。一七世紀に至って生起した商業出版の隆盛に伴う広汎な書物の流通は、近世社会を特徴づける文化現象の一つといえ、人々による学問の営為や民衆諸文化の発生を促し、近世における学問・文化発展の基底を成したといえる。また書物が広汎に流通する社会の到来は人びとの情報共有をめぐる環境を大きく変容させた。書物（出版物）が人々の情報伝播、知の共有をめぐる活動に浸透し、精神生活に大きな影響を及ぼすような社会的位置を占めるものとなった段階で、幕府もまた支配権力としてこれに対応せざるをえなくなった。

支配権力が書物・出版文化をいかに統制したか、すなわち出版統制の問題は、近世出版業の歴史的展開を解明する上で不可欠な論点の一つである。出版統制が実際にどれほど本屋の出版行為や書物の流通を規制したかを解明するためには、それが実施された三都（江戸・京都・大坂）における町政機構等の統制の担い手の動向を具体的に検証する必要がある。また、三都の本屋仲間が幕府に公認されて以降は、彼らもまた統制の末端における担い手となった。しかし、従来の出版統制研究は江戸に偏重して論じられており、他都市において町政機構や本屋仲間が担った出版統制の地域的展開状況が明らかにされてこなかった。こうした課題から、まず第一部では、大坂本屋仲間と出版統制政策の関係性に注目し、大坂における出版統制の地域的展開を明らかにする。

また近世の書物・出版文化は書物を執筆する作者、出版する本屋とともにそれを享受する広汎な読者（顧客）の存在によって成り立つ総合文化産業であった。近世の本屋は出版業者であるとともに書物の小売・卸売も行う流通業者でもあり、本屋の経営は顧客との関係性を前提として成り立っていたはずである。本屋の出版業を成り立たせている環境を解明するためには流通業の経営及びそこで構築された人間関係やその背景としての政治社会状況を踏まえる必要がある。第二部では大坂の本屋河内屋吉兵衛とその顧客であった尊王攘夷派の儒者橋本香坡及び摂津国川辺郡伊丹郷町の酒造家小西家との関係性に注目し、その出版活動がいかなる諸条件のもとで実現したかを明らかにする。

第一部 出版統制政策と大坂本屋仲間

第一章では、出版統制と本屋仲間の関係性を論じる上で大前提となる享保七年（一七二二）の出版条目及び本屋仲間公認の政策立案過程を検討していく。ここでは出版条目のうち、特に第四条（新板書への作者名・板元名明記の義務化）の成文化に至る経緯に注目し、この時期の出版統制政策が江戸という都市の地域的文脈や幕府内における書物に対する有用性認識をもとに展開したものであり、出版条目及び同時期の関連法令が書物名の改変や作者名の不明記、成立年と刊行年の相違等、書誌情報に関する無秩序状態の解消を目指した統制側の意図（秩序化の促進）があったことを明らかにする。

第二章では、江戸で成立した出版統制政策が大坂においてどのように適用され、独自の展開を示したかを検討する。享保期における大坂本屋仲間の成立過程と文化期における本屋仲間の拡大過程を分析し、大坂では本屋仲間が出版業界内の唯一の公認仲間となり、仲間外存在を全てそこに包含させていくことで統制の実現を目指す方針がとられたことに注目する。こうした統制方針は本屋仲間側が出版業界内の特権的地位を獲得していく動向と支配権力側がその存在を介して業界の一元的把握を目指す動向が交錯するかたちで成立したものであったことを明らかにする。

第三章では、天保改革期以降の大坂における出版統制の展開状況を検討する。天保一二年（一八四一）の本屋仲間解散に伴う新検閲体制の導入、幕末期の対外関係の緊張に伴う政治社会情勢の急進的変容に

よって出版をめぐる環境は大きく変わっていた。本章ではこうした新たな局面に、大坂の本屋仲間や町政機構がいかに対応したのか、蘭学書の出版許可状況や市中の海外情勢関連の出版物取締り、本屋周辺の下職（板木屋・表紙屋・板摺職）取締り等を分析して明らかにする。その分析の成果として、大坂では本屋仲間年行司・惣年寄の裁量的判断に委ねられた取締りや町奉行所の統制に対する消極的態度があり、同時期の江戸とは異なった出版統制環境が展開していたことを指摘する。

第二部 大坂本屋をめぐる出版環境

第四章では、大坂の本屋河内屋吉兵衛の出版業を支えた存在として校合請負人橋本香坡が重要な位置を占めたことを明らかにする。大坂本屋仲間による新規開板願数は文化期にピークを迎えた後、文政・天保期頃から次第に減少し、株仲間解散・再興の時期をはさみ、嘉永期以降は明確な凋落期であったとされている。しかし、その凋落期の中にあって河内屋吉兵衛は寛政～天保期を上回る出願件数を記録しており、全体の動向に反して幕末期に大きく成長を遂げた本屋であった。この河内屋吉兵衛の好調な出版事業を支えた存在として、校合請負人としての橋本香坡の活躍があったことを明らかにする。

第五章では、河内屋吉兵衛が営んだ流通業（小売・卸売）の側面に注目し、摂津国川辺郡伊丹郷町がその経営上の重要な販路であったことを明らかにする。河内屋吉兵衛は酒造家小西家のような伊丹の有力町人を得意先としたほか、伊丹郷町で本屋を営んだ大黒屋庄兵衛に対する卸売り業も展開していた。また小西家が本屋の出版活動に対して板木制作費の出資者としても関与していたことに注目し、本屋が流通業の面において顧客と構築した関係性が出版活動の展開にとっても大きな意味を持ったことを明らかにする。

第六章では、本屋の出版業に政治・社会情勢がいかなる影響を与えたかを検討すべく、幕末期の尊王攘夷運動と河内屋吉兵衛の出版活動の関係性に注目する。幕末期の急進的な政治社会情勢の変容は本屋にとっても決して無関係ではなく、安政の大獄をはじめとした幕末期の政治的対立は彼らを必然的に巻き込むことになった。本章では河内屋吉兵衛が周防国の尊攘派僧月性や尊攘派儒者橋本香坡らと交流し、月性著『護国論』など、長州藩尊攘派の著作出版を香坡と協同して水面下で進め、時局の変遷をみつつ出版の機会をうかがっていたことを明らかにする。

補論では、橋本香坡と小西家を主たる分析対象として、本屋の周囲に広がる書物流通環境・読書環境を検討する。小西家が学者との交流、家業の経営による江戸流通ルート、町役人として領主層と築いた関係性等に基づき、多様な書物入手経路を有していたことを明らかにする。また小西家の読書環境が香坡ら交流した学者との関係によって成り立っていたこと、その一方で学者たちが小西家蔵書を学問に活用したことを明らかにし、書物の享受者同士で書物入手・読書環境が相互補完的に成立していたことをみていく。

以上の各章における論証によって、本稿では近世の書物・出版文化について以下の歴史像を提示する。

第一に出版統制政策における江戸の幕府中央役人と大坂で実際に統制を担った人々の認識差をめぐる問題である。幕末の緊迫した国際情勢と学問所検閲体制の導入が重なったことで、江戸では中央幕府役人の時局認識が蘭学書や海外地誌の出版規制の緩和というかたちで出版業界に反映されたが、大坂での出版取締りを担った惣年寄や年行司は、近世社会の先例主義的な法制認識に基づき改革以前の既成の取締り認識に固執したため、結果的に江戸・大坂間の出版環境に大きく差異を生じさせることになった。

また学問所検閲の導入によって、学問所と実際に市中取締りを担った町奉行所との間で出版統制の判断をめぐる対立が生じる場合もあった。幕府内部でも出版統制が一枚岩として実施されたわけではなかったのである。

第二に出版業界の地域性と階層性の問題である。享保期前後には三都で本屋仲間が成立し、寛政期段階に至ると、江戸では本屋仲間以外に地本問屋仲間や板木屋仲間を公認し、掛名主改制度を導入するなど、統制の担い手を複数に分散することで取締りの徹底を目指す方針がとられたが、大坂では本屋仲間を唯一の公認仲間とし、仲間外の者の統制責任は本屋仲間に一任され、業界内の書物売買に関わる者を全てそこに包摂し、仲間の権限を強化することで取締りの実現を目指す方針がとられた。こうした統制方針の異なりによって、大坂における出版統制上の本屋仲間への依存度は江戸と比較して高かったといえる。また「下職」と総称された周辺職人集団（板木屋・表紙屋・板摺職）が仲間内に組み込まれることはなく、一応は本屋仲間の統制下におかれたが、両者の対立関係は株仲間解散・再興を経て、業界秩序が緩むなかで幕末期に顕在化していった。仲間再興後は表紙屋や板木屋による重板類板や違犯出版が横行し、本屋仲間はその取締りに奔走したが、本屋仲間が彼らを内分的に管理する体制は限界が生じており、町奉行所に三職仲間の公認を歎願している。これは単一の仲間集団によって出版業界の複雑な集団構造を一元的に掌握することが困難であったことを示唆している。

第三に大坂の本屋をとりまく出版環境の問題である。一般に近世の儒者は作者あるいは読者として書物・出版文化の中に位置づけられることが多いが、橋本香坡は河内屋吉兵衛をはじめとした大坂の複数の本屋に対して校合請負や序文執筆、資料の提供、板木彫師の紹介、売り上げを伸ばす工夫の助言等、アドバイザー的な立ち位置でその出版事業に貢献していた。また河内屋吉兵衛は有力町人に対する行商（小売）／地方本屋への卸売の両面で伊丹郷町を販路としていたが、その得意先の一つであった小西家は河内屋吉兵衛や他の本屋の出版活動に対して出資者というかたちで関与していた。近世社会における書物・出版文化は読者が作者へと転じる文化的循環構造があったといわれるが、読者が出版事業の参与者へと転じる産業的循環構造もあったのである。しかし一方で香坡のような尊攘派との交流は、政治社会情勢の変容に伴って支配権力の警戒対象ともなった。尊攘派との交流に根ざした書物出版は幕府支配体制下では実現できず、その出版活動は顧客との関係性ゆえに制約される場合もあった。